

平成 30 年 3 月 1 日

博士論文審査報告書

デザイン研究科長 様

審査員主査 矢部 和夫



審査員副査 椎野 亜紀夫



審査員副査 柿山 浩一郎



審査員副査 中原 宏



学位申請者氏名	林 匡宏	学籍番号	1365002
申請学位 (専攻分野)	博士 (デザイン学)	専門分野	<input checked="" type="checkbox"/> 人間空間デザイン分野 <input type="checkbox"/> 人間情報デザイン分野
タイトル (サブタイトル)	シーケンス景観に内在する「アクセント」及び「リズム」の景観的価値が徒歩圏域の魅力化にもたらす効果		
審査日程	最終試験： 平成 30 年 2 月 6 日 公開発表会： 平成 30 年 2 月 16 日		
審査結果	<input checked="" type="checkbox"/> 合格 <input type="checkbox"/> 不合格		

※ 様式第 6 号「博士論文内容の要旨」を添付すること。

審査結果の要旨

本論文はシークエンス景観に内在する点的価値および線的価値を検証し、大都市近郊地域の景観の流れの豊かさの要因と法則性を明らかにしている。既往研究は景観を連続で捉えていても、点的要素の効果測定に留まり、線的な景観の「流れ」の心理的效果を検証していない。これに対し、本論文は景観による「高揚感」や景観への「期待感」と景観の時間的流れとの関係を扱った点に新規性がある。すなわち、景観上の隠れたリズムとアクセントを、点ではなく時間軸を持った「変化」として定量的に評価・見える化した点が特筆される。

さらに、その結果を用いて地区の個性化を促すシークエンス景観のデザイン手法を提示し、景観まちづくりへの応用の可能性を示した点や、自らのまちづくり活動の実践活動も研究データとして加えるなど、まちづくりの理論的研究のみならず実践的研究を融合している点も意義深い。

また、論文全体にわたり、論の構成や分析のプロセス、解説等を豊富なチャートで表現し、ビジュアルで理解を容易にする工夫が随所に見られる。本学デザイン研究科の博士論文として新たな表現を取り入れた点も評価に価するものである。

本論文の主な研究成果は以下の通りである。

- 1) 研究対象地区（大都市近郊地域）において任意の調査ルートを設定し、261 の景観画像の景観要素構成比を計測することで、ルート上の地区内の景観特性と景観変化量を把握した。その結果、当該地区では「舗装」および「空」の占める割合が高いが、「街路樹」、「自然資源」、「植栽」、および「樹木」の合計である「緑視率」は全体の25%となり、一定程度の緑量が確認できた。また、景観要素構成比の変化量が著しく大きい地点は10箇所確認でき、その変化の要因は大半が緑に関する景観要素であった。このことから、設定した調査ルートには変化性と多様性があり、仮説を検証するためのルート設定として妥当性が確認された。
- 2) 上記のルートを対象に、経路移動時の被験者の高揚感を計測した。その結果、「歴史性」や「自然性」など景観の背景に時間軸を有する「時間景観」に評価が集中した。また、景観要素は全体を通して「街路樹」、「自然資源」、「植栽」、「樹木」などの自然性の高い要素が高評価であった。特に高揚感が上昇した区間は4箇所あり、最も高揚感が上昇したのは、「植栽」、「樹木」、および「歴史文化施設」に囲まれた歴史的建築物が密集している区間であった。
- 3) 各種ワークショップで挙げた地域ニーズや活性化アイデアを、「短期実現性」、「持続可能性」、および「まちづくりへの寄与度」という3つの指標を用い、関係者へのヒアリングを踏まえ定量化（得点化）した。その結果、場所は共通して河川空間や公園など、緑の資源が豊かなオープンスペースに期待する傾向がみられ、手法に関しては自然資源の活用が、機能性については時間消費型の滞留空間が、それぞれニーズとして顕在化している。対象地区では自然資源など活用すべき素材は存在するものの、現状はそのポテンシャルが発揮されておらず、これらの資源を活かした快適な居場所づくりが求められていると考えられる。

- 4) これらの調査結果を用いてシークエンス景観の時間的、空間的“豊かさ”を明らかにし、対象地区の徒歩圏域の魅力化と個性化に向けた法則性について言及した。ここでいう「点的価値」とは、切り取られた景観シーンの中で構成される要素が、高揚感や期待感の向上に寄与する価値であり、「線的価値」は、シーンの前後関係など景観の変化量、およびリズムやメリハリといった時間軸を有する景観特性が高揚感や期待感に寄与する価値である。その結果、点的価値については「樹木」、「自然資源」、「歴史文化施設」などが市街地景観の中で景観の「アクセント」となり、高揚感や期待感に高く評価されていることが明らかとなった。線的価値については、10～50 mの比較的近距離の景観体験が次の景観の高揚感に寄与することが明らかとなった。また、類似した景観要素構成比のシーンであっても、そのアプローチまでの景観変化によって評価が異なるなど、シークエンス景観には高揚感に寄与する「リズム」が内在することが明らかとなった。加えて、高揚感が連続して低下する区間が80 m以上続くと、その延長距離に比例して高揚感が高まる傾向もみられた。これにより、画一的な市街地景観など単体では魅力の低い景観であっても、連続する景観を「線」として捉えることで、期待感を蓄積させる重要な景観要素として存在することが明らかとなった。
- 5) 研究の総合考察として、対象地区の徒歩圏域の個性化と魅力化に資する景観づくりのデザイン手法「シークエンス作法」を整理した。「シークエンス作法」は、地区の景観要素構成比調査と高揚感調査、およびそれらの分析結果を根拠として考察する「景観設計の手引き」である。すなわち、この作法を考慮して形成された景観は、地区内の景観リズムの中でこそ評価され、地区独自の魅力や個性を創出する要素として「徒歩圏域の個性化」に寄与すると考える。「シークエンス作法」検討の際には、分析結果を踏まえ「①場面の転換」、「②ヒューマンスケール」および「③期待感の蓄積」という3視点を設定し、高揚感向上に資する「シークエンス作法」として適用可能性のある区間について考察した。

本論文は、大都市近郊地域において自然や歴史などの「長期的時間軸」を持った景観要素は「アクセント」として、「短期的時間軸」である景観変動は「リズム」として、それぞれある一定の傾向や法則性をもってシークエンス景観の魅力を高めていることを明らかにした。また、本論文で提示した「シークエンス作法」は「景観設計の手引き」として展開することが可能であり、本論文の学術的意義が深いと判断できる。以上のことにより、本論文は博士論文（デザイン学）として十分価値あるものと認められる。

平成 30 年 2 月 6 日（火）、本学芸術の森キャンパス「大学院棟レクチャールーム」において審査員 4 名による「本審査会（最終試験）」を実施し、本審査会実施要領に基づき、本論文についての発表と口頭試問を行った。

多方面からの質問に的確に回答できたことに加え、論文も予備審査での指摘事項に対し、十分な加筆・修正が施されていることを確認した。とくに、調査方法や計測方法に係る詳細の解説が加えられた点、巻頭で用語の定義を明確に行った点、各章冒頭において章の目的や他章との関係を明示することで、章の位置付けがわかりやすくなった点、論述に直接係る図表はもとより、プロセスや論理等も豊富に視覚化して図示するとともに、図をさらに改良をして理解を容易にする

工夫をしている点など、真摯に積極的に論文の改善に努めたことが評価される。

本論文は、本学大学院デザイン研究科の博士論文審査基準である研究課題の意義と独創性、先行研究の調査、研究方法の適切性、結果・考察の明確性と新規性、および論文構成の体系性と整合性について以下のとおり十分満たされていると判断した。

【①研究課題について】

本論文は景観による「高揚感」や景観への「期待感」と景観の時間的流れとの関係を扱った点でシークエンス景観研究に関する独創性がある。

【②先行研究の調査について】

1章でシークエンス景観研究に関する先行研究について、その特徴と範囲を明確にするとともに、「点-線」と「心-体」の2軸で先行研究の位置関係を整理した上で、本論文の位置付けを明示している。

【③研究方法について】

研究における調査、分析方法は景観写真画像解析、被験者による景観写真評価、将来まちづくりアイデアについての地域団体や行政機関等による期待度評価、統計解析など、用いた方法は適切であり、すべて客観的に行われている。

【④研究結果・考察について】

シークエンス景観の「アクセント」として働く景観要素や、景観の前後関係や変化量が「リズム」として高揚感に寄与することを明らかにして研究目的を達成するとともに、これらの法則性を活用したまちづくりデザイン手法を提示した点も評価できる。

【⑤論文構成について】

1章において論文の構成をフローチャートにより詳細に解説し、目的、方法、調査、分析、および考察の関係が体系的に示され、全体の整合性が取れている。論文目次もフローチャートに準じている。

これらのことから、最終試験は「合格」と判定した。なお、加筆修正に関する軽微な指摘事項が新たに挙げられた。

最終試験「合格」を受け、平成 30 年 2 月 16 日（金）、本学芸術の森キャンパス「階段教室」において「公開発表会」を行った。その際、多くの質疑に対する的確に回答できたと判断する。

平成 30 年 2 月 23 日（金）に提出された最終論文は、公開発表会での質疑や助言を十分にふまえるとともに、最終試験後の指摘事項については、すべてにわたり適正な修正が行われていると判断する。

以上のことから、博士論文審査は「合格」と判定する。